

血液型性格心理学の再評価

—大村政男生誕 100 年を記念して—

企画者・司会 浮谷秀一（東京富士大学）
話題提供者 山岡重行（聖徳大学）
藤田主一（日本体育大学）
指定討論者 浮谷秀一（東京富士大学）

【企画意図】浮谷秀一（東京富士大学）

血液型について、大村政男が研究発表したのが、1984 年に富士短期大学（現東京富士大学）で開催された日本応用心理学会第 51 回大会である。発表題目は「血液型性格学」は信頼できるかであった。この発表では、いくつかの調査などを踏まえて、思い込み効果の善用が得策ではないかと締めくくっている。この発表を皮切りに、30 年間第 30 報まで発表が続けられている。第 10 報（1993 年）から浮谷が、第 22 報（2005 年）から藤田が研究に加わった。また、第 75 回大会（2008 年）から第 80 回大会（2013 年）まで自主ワークショップ「血液型による性格判断を信じる人はなぜ多いのだろうか」を実施した。今回は「血液型性格学」を再評価してみる。

【話題提供者 1】山岡重行（聖徳大学）

大村政男は日本応用心理学会において、『「血液型性格学」は信頼できるか』という統一タイトルで毎年継続して研究発表を行ってきた。第 1 回目の発表である 1984 年の日本応用心理学会第 51 回大会の段階で既に、「思い込み効果」という言葉を使っている。

血液型性格の内容は誰にでも当てはまるフリーサイズの内容であるためにバーナム効果が生じ、それが自分にだけ当てはまるものとして刷り込まれてしまい、血液型性格が自分に当てはまるという実感を生み出していく、と考えるようになり大村の「FBI 効果」となっていく。

話題提供として、「血液型性格が当てはまる実感」は血液型性格を受容する程度の高い高受容群の「思い込み」であることを、山岡の調査結果から明らかにする。

山岡は 1999 年から断続的に血液型性格に関する調査を行っている。血液型性格の熟知度と確信度、血液型性格を信じる理由／信じない理由、血液型性格に由来する快体験と不快体験など様々な内容の調査を行っているが、その中心となるものは、血液型性格項目を使用した調査である。

松井(1991)や縄田(2014)は、他者が血液型性格とは無関係な目的のために行ったランダム・サンプリングに基づいた大規模調査結果を血液型により差があるか再分析した結果を報告している。両者が使用した質問項目は、「各血液型の性格」だと血液型性格肯定派が主張する項目ではないために、血液型性格肯定論者にとっては、「血液型によってそのような項目に違いがあると主張していないのだから、差が出ないことが血液型と性格の無関連性の証明にはならない」と反論する余地が残されている。この反論の余地をなくすためには、「各血液型の性格特徴」と血液型性格肯定論者が主張する項目を使用することが必要になる。

渡辺(1994)は、1990 年代初頭出版されていた 6 冊の血液型性格本のうち 3 冊以上に共通して特定の血液型の特徴として記述されていた項目を各血液型につき 7 項目、合計 28 項目抽出した。山岡はこの項目を血液型性格項目として採用し自分に当てはまる程度を 5 件法で回答を求め、各血液型群の平均値に有意差が認められるか検討した。

山岡は血液型性格の熟知度と確信度の回答から調査対象者を血液型性格の知識が豊富で血液型性格の妥当性をかなり信じている血液型性格高受容群と、知識が乏しくあまり信じていない低受容群に分け、各群においても同様の分析を行った。

結果は学会当日会場で発表するが、まさしく大村が最初期から主張していた「思い込み効果」であることが明白となった。大村の慧眼にあらためて敬意を表したい。

【話題提供者 2】藤田主一（日本体育大学）

大村政男（以下、すべて敬称略）は、1925（大正 14）年 10 月 4 日生まれであるから、今年の 10 月で生誕 100 年を迎え、また没後 10 年になる。大村の心理学者としての研究歴を振り返ると、一貫して性格心理学の領域を外れることはなかった。

大村はまだ学徒のとき、古川竹二の『血液型による気質の研究』（1927 年）の論文に出会った。彼は、自分の血液型と性格や行動とを照らし合わせて非常なる興味を抱いたが、当時所属していた研究室のスタンスでは、考えることさえ認められなかったのが、大村の「血液型と性格」との興味は抑圧されていった。研究者として歩み始めた彼の研究生生活の前半は、どちらかといえば地味で繊細な領域に埋没していたといっていよう。ただ、潜在的にこの領域への伏線があったに違いない。

研究の転機は、学生の卒論指導がきっかけであった。その後、日本応用心理学会第 51 回大会（1984 年）の口頭発表『「血液型性格学」は信頼できるか』をスタートとして、毎年、日本応用心理学会や日本心理学会、日本教育心理学会などでの学会発表や、学術誌への論文投稿、雑誌等への論説執筆をとおして、「血液型と性格」との関係を批判的な視点から論及していった。彼の研究生生活の後半は、「血液型と性格」にどっぷり浸かり、それがとても楽しいものになった。このような取り組みは、おそらくわが国の心理学者としては最初であっただろうし、今まで抑圧されていた大村の姿が覚醒したといっても過言ではない。彼の発信はマスメディアにも取り上げられ、たとえば大橋巨泉、小倉智昭、ビートたけし、森本毅郎などテレビ界の巨物と接触することもあった。大村の批判的研究は、古川竹二の著書や論文をきっかけに、能見正比古（大村と同じ 1925 年生まれ）の書籍に記された内容や、その嗣子である俊賢と対峙するまでに及んだ。とくに俊賢とは、テレビや雑誌の中で激論を交わした。

大村は、細かなことを調べるのが好きだったし、また、ひらめきが湧くアイディアマンだった。たとえば、軍部の組織と血液型との関係に注目すると、もともと戦記物が好きだったこともあるが、いろいろな文献を獵歩して新しい資料を提出したり、血液型と性格が関係するかのよう感じさせるトリックに「FBI 効果」と命名し、「血液型の信者は、FBI の力でも捕まえられないのだ」と、ウィットに富んだことば遊びをしたりするのを忘れない。そのエネルギーは留まるところを知らず、雑誌『月間血液型研究』に掲載されている論説をひとつひとつ検証してしまうのである。

大村は、3 冊の単著を上梓し、数多くの学術論文を公表した。また数えきれないほどの学会発表や講演、各種雑誌への執筆をこなしてきた。大村のあとから、この分野に関わってきた研究者たちは、多かれ少なかれ、彼の文献やアイディア、さまざまな資料等をステップにしたに違いないので、今、我われは彼をもう一度再評価すべきだろうと思う。